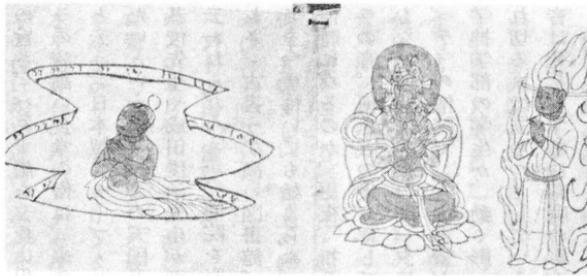


観音経を読む

森 鹿三



「仏典を読む」という本欄の執筆を命ぜられたが、専門外のものにとっては、やはり荷が重い。学生時代に下宿していた南禅寺の塔頭で毎日耳にしていた『観音経』を取り上げて、ともかく責を果たそうと考えた。

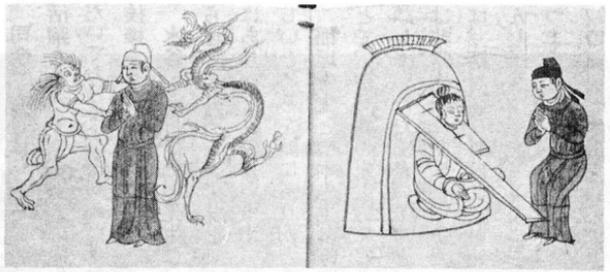
アミダさんの左右に観音と勢至の二菩薩が侍立している姿は、前号の本欄に載った『観無量寿経』にも活写されている。だが観音さんのことを特に詳しく語っているのは、やはりこの『観音経』にまさるものはない。『観音経』というのとは、もともと『法華経』の中の「観世音菩薩普門品」のことであるが、中国でも古くから独立のお経のように『観音経』と通称しているのである。ニジムジンニボサ ソクジュウザキ、ヘンタンウケン、ガツシヨウコウアツ、ニサゼゴン がその出だしであって、耳だけで接していたころは、その意味もわからず、ひたすらその調子の快さに聞きほれていた次第である。やが

て折本のお経を借りて来て、字面をたどっていくと、生半可ながらも少しずつ意味がわかって来る。今の出だしの文句も

その時、無盡意菩薩は即刻に座席から起ち上って、上衣を左肩だけにかけて右肩をあらわにし、佛にむかって合掌し、次のように語った

という意味であることが、経文を見て知ることができた。無尽意が仏に語ったのは、「どういっわけで観音、くわしくは観世音菩薩と名づけるのか」という質問であった。ここまでが『観音経』の序の部分で、次に長い長い中心の部分がつづく。つまり提出された質問に対する仏の応答なのである。

計り知れない多くの人びとが、いろいろな苦悩を受ける時に、この観世音菩薩を聞いて、その菩薩の名を一心にとなえると、観世音菩薩は、即刻にその音声を観じて、



S 6983 『観音経』 冊子

ブリテイッシュ・
ライブラリー所蔵
藤枝晃博士 撮影

By courtesy, the Trustees
of the British Library

苦悩から解放させて下さる。それで観音と名づけるというわけだが、その著るしい例がつきに列挙される。もしこの菩薩の名を心にとどめる（持名）者は、たとえ大炎の中に入っても、この菩薩の威神力によって、火も焼くことができな。また大水に流されることがあつてもすぐに浅瀬に漂着する。このような火難・水難につづいて風難・被害難・羅刹難・杻械難・怨賊難があげられるが、すべて一心に観世音菩薩の名号をとなえることで解脱できると説く。

ところで上欄に掲げたのは、九世紀ごろの中国でかかれた『観音経』の絵の一部であるが、右側は前述の火難と水難からの解脱を描いたものであり、左側は杻械難と羅刹難の図である。もちろん図の下には『観音経』の本文が書写されている。その杻械難とは手かせ・首かせで繋ぎ縛られることだが、これまた観世音菩薩の名をとなえると、忽ちそれらのかせが解けてしまうという。ここで「若有罪若無罪」つまり有罪にもあれ無罪にもあれ、いずれも解脱できるといふところに、国法をこえて観音の威神力が優位する気概が見えておもしろい。次の羅刹難の図は、この三千大千国土に充滿する悪鬼毒気を示したもので、これまた称名によって払除できるといふのである。経文には「是諸悪鬼尚不能以悪眼視之」とあつて、悪鬼に悪眼、今流にいえばイーブルアイであろうか、この悪眼で視られることで人びとはまず苦悩にとりつかれ

るのであろうが、称名によって、悪鬼の方がいすくめられて、まともに視られない。視ることさえできないのだから害を加えるなど思いもよらぬ（「況復加害」と説く。上述の七つの難は外部から来るものだが、愛欲とか憎悪とか愚痴とかの各自の内らからでる悩みもまた称名によって解脱できるのである。この内外の苦難を観音は除去して下さるのであるが、このように悲心をもって抜苦する一方、福德智慧の男児、端正有相の女兒を祈願のまにまに授けて下さるといふ慈心与楽の威神力をも兼ね備えられている。

このあと無盡意菩薩は観音がどのようにシヤバ世界を歩きまわり、どのようにして衆生に教えを説かれるのかと質問したのに対して、仏は懇切に説明をする。まず自身を以て得度すべき者は観音は仏身を現わして為めに説法する。次は辟支仏（縁覚）、次は声聞、最後に執金剛神のすがたを現じて説法するまで三十三変身が委細に述べられる。このあたりは「應以某身得度者即現某身而為説法」と上下の某字を変えながらの繰り返しで調子が高揚する。またさらに後の偈（韻文）において十二回出現する「念彼観音力」は三門博の浪曲にまで取り入れられているので、人口にもカイシヤする快調のところである。ここでもう一度はじめから『観音経』を読んでみよう。そして改めてゆつくり考えることにしよう。

（文学部教授）